

企業価値を向上し続けて50年
イル・キャンティグループ 笹間章 CEO

おかげさまで
創刊
40
THANKS ANNIVERSARY
周年



安川哲二の今月の一品



日本ワインに賭けた夢を「味わう」ことができる

『シャトー・メルシヤン』

桔梗ヶ原メルロー シグナチャー



「シャトー・メルシヤン 桔梗ヶ原メルロー シグナチャー」
750ml、オープン価格

ルシヤンワインがある。歴史、規模、世界のトップワインに肩を並べるクオリティーで、日本ワインとしては輸出も比較的好調のようだ。メルシヤンで忘れられないのは「シャトー・メルシヤン 桔梗ヶ原メルロー シグナチャー」

外国人旅行者向けアンケート「何に期待して日本に来る？」の結果は、ダントツ1位が和食を食べたいである。あわせて、日本酒を飲みたいという意見も多いが、海外で和食（なんちゃつを含め）や日本酒を体験できる機会は「いふんと増えてきた。危惧するのは、日本ワインだ。ワインは世界に超のつく競合がごまんとあるし、日本でワイン、造っているの？」という一般外国人も山のようにいる。日本ワインの輸出にはまだまだ壁がある。だから、日本に来る外国人旅行者には、やっぱり、日本ワインを提供しないといけないと思うのだ。日本ワインの草分けのひとつにメ

985年ヴィンテージだ。初リリースされたころ私はワイン勉強の真っ最中で、ボルドーやブルゴーニュ、カリフォルニアを必死に飲んでいたので、そんななか、このワインを飲む機会があり、あまりのおいしさに驚いた。日本でもこんなワインができるんだと。メルローらしいきめ細やかなタンニンに、プラムのような凝縮した果実味、ミネラル感、樽のフレーヴァーも心地よく、非常にバランスのとれた味わいだ。あれから37年、さまざまな変遷を遂げており、現在は、特別な区画を選定し、樽セレクションにより厳選したものは「シグナチャー」という名称がつけられ、メルシヤンワイ

ンのアイコンシリーズになっている。「シグナチャー」とは、特別なワインに醸造責任者が署名を入れることだとか。署名するのは、チーフ・ワインメーカーを経て現在ゼネラル・マネージャーの安蔵光弘氏。田崎真也さんの勉強会や試飲会などで何度かお目にかかったことがあるが、穏やかで気さくで、それでいて知的な印象の方だ。日本ワイン業界をけん引した故浅井宇介氏から絶大な信頼を得て日本ワインのために尽力されている。この安蔵さんや浅井先生、日本ワインに携わる人々を描いた映画「シグナチャー」がこの秋全国公開される。浅井先生とは、運よく、何度かお話の機会を得たことがある。

業界のはじつこ片隅にいる私の質問や意見にも丁寧に答えていただいたことを忘れない。映画を見て、思い出した。読者の皆様もご覧ください。日本ワインに命を懸ける人がいること、日本ワインが私たちの誇りであること、もつともつとおすすすべきことを今一度実感できますから。見た後は、とにかくワインを飲みたくなるので、その準備も忘れずに。そして、外国人にお勧めしたくなりますよ。

「シグナチャー」日本を世界の銘醸地に（柿崎ゆうじ監督作品）
11月4日（金）新宿武蔵野館ほか全国公開